

巻頭言

女は機械に弱いか

Is It True That Women Are Not Mechanical?

土屋 賢二

Kenji TSUCHIYA

女は機械に弱いといわれているが、これはどこまで事実なのだろうか。この論文集の中でわたしに理解できるものがないことを見ても、機械や工学に強い女がいることは明らかである（男に論文を書いてもらったのではないと仮定する）。

しかしわたしのまわりで機械に強い女、工学や技術に強い女が存在したためしがない。一般に、電気製品が故障したとき、プラグが差し込んであるかどうかを調べたり、色々なところを叩いてみたり、ケースを開けて内部を観察してまた閉じたりするのは男の役割であるし、調子の悪いパソコンをいじってさらに悪化させるのも、ヒューズを交換するのも男の仕事である。

こういうときの男は、無知な女に代わって機械を操作している、という誇りをもっているが、わたしは、男が女の戦術に乗せられているだけではないかという疑いを振り払うことができない。あまりにも女に都合がよすぎるような気がする。女は機械音痴のふりをしているだけではないのか。そもそも、電球や蛍光灯を交換したり、本棚を修理したりすることが、「機械の操作」といえるのだろうか。

考えてみれば、機械の操作を覚え、間違えないように神経を使って操作するよりは、「ビデオデッキをつないでちょうだい」という音声を発する方が楽なのだ。実際、王様がヒューズを替えたり、DVD プレイヤーの接続をしたりするだろうか。音楽や美術など、芸術の分野では男が多いし、工学の分野でも男が多いが、これらは本来、従僕の仕事である。王様は楽しいかどうか、快適かどうかだけを問題にしていればいいのだ。

女も王様と同じではなかろうか。女は、車の運転は男にまかせて、「X デパートへ行って三時間後に迎えに来て」とか「どこか海が見えて料理がおいしい所へ行ってちょうだい」というだけでいい。後は男がやったことをホメるなり叱るなりすればいいのだ。

もちろん女には重要な仕事がある。子どもの教育方針を決め、家族への予算を配分し、体型を改善し、身にまとうものを整備しなくてはならない。電気製品の故障の原因に頭を悩ませる暇などないだろう。だが、生活工学専攻の学生だけは、嬉々として役割を果たす男を、「機械に弱いから」という口実で下僕扱いしないでもらいたい。せめて「体調が悪いから」という口実を使ってもらいたいものだ。

(文学部長)